

# ふじさん

fujijoho group monthly magazine

～ 2025年指針 ～

開 点

## 富士情報

[今月のひとこと]

7月5日

- ・新入社員開発研修成果発表会を開催
- ・役員人事・昇任発令



長慶寺の梅花藻

写真提供：都留市 産業課



今月のひとこと

7月5日

社長 渡辺直企

2025年7月5日に起こるという「大災難予言」がSNSなどで大きな話題となりました。漫画家・たつき諒氏が1999年に出版した単行本「私が見た未来」で2011年3月の大災害のことが描かれていて、これが「東日本大震災を的中させていた」と話題になったことがありました。その後2021年に「私が見た未来 完全版」として再出版され、その帯に「本当の大災難は2025年7月にやってくる」と描かれていたことから、2025年7月にまた大災害が起こるとして話題になりました。特に香港ではSNSで広まり、有名な風水師も日本への渡航を控えるよう呼びかけるなどしたため、旅行者が激減し航空便が運休するなど、大きな影響がありました。

1973年には五島勉氏の「ノストラダムスの大予言」が出版され、本の中で「1999年7の月に恐怖の大王が来るだろう」と予言しています。小学生の頃に読んだ覚えがありますが、当時怖い感情を持った記憶があります。次第に忘れていき1999年頃には、当然気にかけることもなくなっていました。

今回は鹿児島県トカラ列島の地震の頻発もあり、若干真実味を帯びた感じはありますが、気象庁の野村長官が5月21日に「場所、時間、規模を指定して地震が起こると予知することについて、現在の科学では不可能。そのような言及は完全にデマであり、ウソです」と指摘している通り地震に関しての予知は正確には無理だと考えておいたほうが良いと思います。

地震予知といえば政府の地震調査研究推進本部(地震本部)が今年の1月1日に南海トラフ地震の発生確率を従来の「70%~80%」から「80%程度」に引き上げています。これは大幅に確率が上がったわけではなく、確率の計算時に2桁まで算出していて、昨年の確率が「74%から81%」で、今年は「75%から82%」となり、四捨五入した結果上記の通りとなったとのこと。

南海トラフ地震は684年の白鳳地震以降記録が残っています。1361年の正平地震までは200年以上の間隔で発生していましたが、正平地震以降は90年から147年と間隔が短くなる傾向があります。

地震本部は南海トラフの地震の予測に、直前の地震の規模から次の地震の発生時期を予測する「時間予測モデル」を用いています。高知県室津港の地震時における隆起量を元に算出しています。1707年宝永地震では1.8m、次の1854年安政地震では1.2m、直近の1946年昭和南海地震では1.15m隆起しています。3つの地震における隆起量と地震の発生年をグラフにするとほぼ直線となり、1.15mの隆起から次の地震までの間隔を計算すると88.2年つまり2035年が次に発生する時期と予想しています。

これまで記録されている12回の南海トラフ地震に関してマグニチュードをエネルギー(J:ジュール)に換算して、地震の規模と前後に発生した地震との間隔で相関を計算してみました。すると地震のエネルギーは前の地震からの間隔の相関は0.291、次の地震とは0.128でした。0.3~0.5が弱い相関ですので、若干ですが地震のエネルギーは前の地震からの間隔に起因する割合が高いともいえます。エネルギーが溜まる時間が長くなるほど地震の規模が大きくなるというイメージです。前述の「時間予測モデル」のように直前の地震の規模から次の地震までの間隔を得るというモデルも、盲信せず一つの考えとして受け入れる必要があると思います。